

平成 28 年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

1 学校教育目標

人間として生きぬく力を育てる

- ・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子
- ・はげまし、支え合い、共に伸びる子
- ・強い心とたくましい体をつくる子

2 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	確かな学力を形成するための取組 ・教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。	「『子ども—文化—教師』をつなぐ」（4年次）のテーマのもと、年間を通して、前期授業研究会、後期授業研究会、そして研究発表会と、教師は力量を高めながら児童の学力形成に尽力した。CRT検査によって学力の全体的な傾向を把握することで、基礎的基本的な学力を充実する取り組みを続けている。ただ、全国学力学習状況調査の結果において学力の2極化がやや見られる傾向にある。	B	・特別な支援を必要とする子どもも多数おり、授業づくりの段階から指導方法等を考えていく。 ・子ども一人一人のニーズを把握し、その子の理解度を考慮した個に応じた指導が行えるように工夫する。
	豊かな心を育むための取組 ・全校縦割りの集団活動や道徳教育などを通して豊かな心を育むことをめざす。	道徳教育や異学年交流を通して、豊かな心を育む取り組みを進めてきた。その中で多様な個性を持った子どもたちへ対応するために、附小つ子連絡会で、生徒指導上の課題、学校生活面での課題等を共通理解し、子ども理解への取り組みを強化している。またスクールカウンセラーや大学の専門家の協力を得ながらよりよい発達を支援するための取組を継続的に行っている。	B	・道徳の教科化も視野に入れた、道徳教育の取組を思考する。児童理解を深めると共に多様な個性を持った子どもたちへの対応できる資質能力の向上を図る研修の機会を増やす。
	健康な体を培うための取組 ・様々な体験的な活動などを通して健康な体を培うことをめざす。	体育では、運動文化の視点から児童の実態にあった教材づくりを行い、実践することで健康な体作りをめざした。また、林間学校、臨海合宿、耐寒訓練マラソン大会等では、体力と共に強い意志力を育んだ。家庭での生活習慣を適正に保つために保護者に対して保健日より、給食だよりによる啓発活動を推進するとともに、学校生活の中での安全意識を高めるために学級指導を繰り返し行った。	B	・基本的な生活習慣の確立のため、「早寝・早起き・朝ご飯」等、家庭への啓発活動を充実する。 ・学校生活での安全確保ため、安全点検を徹底すると共に、廊下の歩き方等校内での過ごし方の指導を徹底する。
学校運営	組織運営 ・附属学校長がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。	校長・副校長・教務主任が常に全体を見据えた経営を心掛け、全職員の共通理解のもと教育活動を展開してきた。今年度も昨年度に引き続き職場の労働環境の改善を目指し、会議時間の設定等会議の持ち方等を意識させ、効率化を図り、個々の時間を確保できる取り組みを進めた。	B	・教職員の健康管理や仕事と生活の調和を図る観点から勤務時間の適正化が大切であるという意識を高めさせる。
	教育実習 ・大学の計画に基づき、実習生の資質・能力を高められるような実地教育を行う。	教育大学附属小学校としての教員養成の責務を教員に繰り返し説くと共に、大学から附属学校園への教育実習校としての評価や期待を教員に周知して教員の意識向上を喚起しながら、実地教育の充実を図った。	B	・現場での若手教員をめぐる課題等の共通理解を図りながら、指導教員としての問題意識を高めていく。
	大学・附属中学校・附属幼稚園との連携・協力 ・附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。	従前の附属学校園連携委員会・連携推進協議会に加え、様々な幼稚園、中学校の行事への参加を教員に呼びかけて、交流の深化に努めた。附属中学校の研究発表会に参加したり、幼稚園のもちつき行事に参加したりするなどして連携を深めた。	B	・附属学校園で一貫した教育観をもとにした教育方針を確立していく必要がある。
	保護者との連携協力 ・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。	年々、PTAの協力体制のノウハウや引き継ぎが確かなものになってきており、創意工夫のある活動を推進している。PTA役員を中心に様々な学校行事への支援や校内環境の充実など積極的に尽力して下さっている。保護者の価値観の多様化や家庭環境の複雑化等により、子ども間のトラブルや学校への要求等対応に苦慮する場面が多くなってきている現状があり、職員間での情報の共有・共通理解に基づいた行動等教職員の意識向上を図っている。	A	

3 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<ul style="list-style-type: none"> ・附属だけでなく、公立学校でも学力の2極化が問題となっているところが多い。個々の教育的ニーズを把握して、個に応じた指導を充実させる事で、2極化の解消に取り組んでもらいたい。 ・道徳の教科化に向け、評価についてどうするかを小学校だけでなく中学校とも連携して取り組んでもらいたい。
<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の勤務時間の適正化は重要な課題である。保護者としては、心身共に健康で、元気な先生に子どもを指導してもらいたい。 ・教育実習の指導に熱心なことは大変よいことである。 ・今後もPTAとの連携協力を大切にしていてもらいたい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
研究活動	大学との研究協力 ・大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的・物的資源の効率的活用を図る。	各教科等において共同研究を積極的に進めている。研究発表会では、助言者として10名の大学教員に指導を請うことができた。	B	・「大学教員と附属学校園教員との連携専門部会」の組織を積極的に活用する。	・大学との普段からの研究協力体制強化という意味でも「大学教員と附属学校園教員との連携専門部会」組織の積極的な活用を期待する。 ・研究発表会開催や研究開発校制度への応募など、研究活動への取組のA評価は妥当である。
	大学との連携体制 ・大学・学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当する。また、附属学校教員が大学・学部の授業を担当する。	大学授業(リフレクション及び学部授業)を附属学校教員が担当した(国語2名、社会2名、図工2名、生活1名、体育2名、英語2名)。研究面だけでなく、学校で日常的に起きる諸問題や課題についても大学との共通理解を図る場を持つようにした。	B	・本校の抱える課題等も含め本校の将来ビジョンを定め、新たな学校デザインをすすめるためにも更に大学と共通理解を図りながら共に検討していく必要がある。	
	全国規模の研究発表会の開催等による地域を越えた普及・啓発 ・附属学校の研究成果について、地域を越えた全国規模の普及・啓発を図る。	研究発表会は、本年度土曜日1日のみの開催で行った。県外・県内から500名あまりの先生方に参加していただいた。当日は、授業参観、研究協議や出版物を通して、本校の研究成果を広めることができた。午後には、教科別分科会に加え、白梅学園大学子ども学部教授無藤隆氏を迎え講演会を行った。そのほか、地域への本校教育の還元活動として、附小交流会を実施している。今年度は、年二回の授業公開、研究協議、情報交換会を実施し、地域の学校の研究活動に貢献している。	A		
	研究開発学校制度等への応募 ・文部科学省等による研究開発指定などを積極的に活用するため、今年度についても積極的な応募を行う。	現在、平成29年度より指定期間4年の研究開発学校実施希望を申請中である。 研究開発課題 社会の一員として新たな問題を創造的に解決する能力を育むデザイン思考教育を実践する新総合領域「未来デザイン科」の教育課程に関する研究開発	A		
安全管理等	防災教育 ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。	担当教員を中心に計画的に防災訓練を実施し、児童の実践的防災能力を高めた。 1学期：火災、2学期：幼稚園との合同訓練による不審者対応、3学期：地震	A	・三附属連絡会等で、防災について幼、小、中連携した取組の方法について協議し、可能なものから実施する。	・幼、小、中に加え地域とも連携協力した防災への取組を行ってほしい。 ・廊下階段の歩き方に加え、挨拶や、トイレの使い方など基本的生活習慣を身につけるための指導を充実させてほしい。
	健康・安全教育 ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	健康・安全については、栄養教諭、養護教諭を中心に担任の協力を得ながら、それぞれの立場から継続的に指導を行っている。今年度は、「いじめ」について三校園共同の研修会を実施するとともに、アンケートをとったり、各学級でケースに応じて指導したりしながら、児童が安心して学校生活をおくれる環境作りに努力した。	B	・校内での怪我を防止するために、校内での過ごし方等の指導を徹底する必要がある。	
	施設設備 ・児童の学校生活の場にふさわしい施設設備を整える。	遊具及び教室の施設・備品について、定期的に安全点検を行い、適宜補修や危険回避措置を講じた。改修計画を立て具体的な整備を推進している。	B	・施設の老朽化が進んでいる部分もあるので、速やかに整備を進めていく。	
	安全管理 ・児童にとって安全・安心な環境を整える。	校内で施錠が必要な場所については施錠を徹底や、危険箇所の把握に努め、修繕等が必要な場合は速やかに行っている。公共の乗り物の使用マナーについては、年々改善が見られているが、表面化しない苦情も少なくない。定期的に、バス停、駅まで教員が同行しながら、指導を継続した。校内で廊下を走っている児童について全校的な指導を行い、安全面への意識化を図った。気象警報発令時の安全な下校のためにメールなどを活用する仕組みを整えた。	B	・引き続き校内で施錠が必要な場所については施錠を徹底する。委員会等の活動の中で学校での安全な過ごし方等を発信する。校外パトロールを定期的実施する。	